

編集長 3 人は 語り尽くせなかった



デジタルプラクティス編集長

平田圭二

(公立はこだて未来大学)

会誌「情報処理」編集長

塚本昌彦

(神戸大学)

論文誌編集長

乾健太郎

(東北大学)

2014年9月26日 化学会館会議室にて

平田 ● 少し早いですが、明けておめでとうございます。

塚本、乾 ● 明けておめでとうございます。

新しい論文の形

塚本 ● 会誌のような読み物を作っていくのと論文誌を作るのでは、やるべきがだいぶ違いますよね

乾 ● 論文誌はかなり粛々ときっちりやっていかなくではいけません。

塚本 ● 編集長としては、論文の採択基準をどうしたりとか、そういう運営方針をどうするかというところが一番重要なのではないですか。

乾 ● 仰る通りですが、その中でもいろいろ新しいことをやっています。特選論文という表彰制度を新しく導入しましたし、審査期間を今以上に短縮する試みも始めています。優秀な論文の英語化の支援など、インパクトファクタ取得に向けた施策もいろいろやっています。インパクトファクタについては、喜連川会長はレイテンシが問題だとおっしゃっています。研究成果を得てから論文が出て、さらにその論文を参照した論文が出るまでですぐ4年ぐらい経ってしまうわけですよ。そんなレイテンシの大

きな指標で研究を測るというのは今の時代に合わないのではないかと。編集委員会に何か新しい指標を検討してみてくださいと言われています。

平田 ● 恐らく、書くプロセスと査読するプロセスの両方を短くする必要がありますので、参照される部分ごとに書いていく方法が考えられないでしょうか。

塚本 ● 論文の形は実際変わってきています。たとえばビデオが付くとか。

乾 ● サプリメントとしていろんな形式を受け入れられるようにしていきたい。

塚本 ● 論文に付けられた「いいね！」の数で評価するという新しいビジネスモデルはどうでしょう。

乾 ● それは可能性がありますね。

塚本 ● インパクトをカウントする対象をもうちょっと広くして、論文を書かない企業や教育の人などにも論文を見てもらった回数を入れた新たな指標をつくと、今の研究者同士の相互参照とは違う、もっと産業や教育の中で役に立つようないい論文を見つけ出していけるかもしれない。だから、論文誌の編集委員長というのは、アカデミックの在り方そのものを再構成していくポテンシャルさえあるのかなと考えます。

乾 ● そうなると今のように2年の任期で動かしていこうというのは、短い感じがしますよね。

華やかな編集委員会

乾 ● 会誌の編集委員会ってどんな雰囲気なのですか。

塚本 ● 今年から私が編集長になったとき、編集長指名枠 4 名の編集委員 4 名とも女性の方を指名しました。とても前向きな方々で、そのおかげもあって、編集委員会は非常に華やかで雰囲気は明るいのです。今の会誌編集委員 24 名のうち 7 名が女性です。やはり、前向きで明るく編集をやっていくというのが重要なと思っています。

平田 ● 私も最近 1 回出席しましたがけれどもいい雰囲気でした(笑)。勢いがあるのでいろいろ新しいことが期待できそうでした。

塚本 ● 基本的に、この編集委員会というのはボランティアですから、それぞれの人が自分がやりたいと思うようなことを楽しくやっていけるようでないとい紙面が面白くならない。女子部というコーナを立ち上げて、毎回 2 つずつコラムを載せるようにしました。そしたら私もびっくりしたのですけれども、面白いんです。おじさんが書くと大概硬くなりますよね。でも彼女たちはえらい柔らかいトーンで。

平田 ● 視点が違うわけですね。男性が書くと、最近どこそこの会議に行ってきたとかそういう話から始まるのが多い。

塚本 ● そうそう、この 10 月号のこの書き方すごくないですか。ヨガを始めました、旅好き女子のひとり言、面白いですよ。論文誌でもコラム、ちょっとやってみたらどうですか、今回の査読とかいって(笑)。彼女たちも喜んで書いてくれて、お互いに読んで刺激を受け合って、よりクオリティを高めているという感があります。

平田 ● デジタルプラクティス (DP) も 2014 年 9 月から編集委員会に新しく女性委員 3 人に加わっていただいて、今では委員 17 人中 4 人が女性になりました。

メディアミックス

乾 ● DP は単体で売っているのですでしたっけ。

塚本 ● 今は無料の電子版のみの状態ですが、その電子版に辿りつくまでの入口がちゃんといろいろあれば、読んでみようかなという気になる。

平田 ● メディアミックスと言っていいのかな。会誌、会員宛ての ML、全国大会予稿集 CD などいろんな媒体が会員、非会員に配布されているので、その中のあらゆるところにタイムリにメッセージやリンクを埋め込みたいところです。情報学広場に掲載されている論文に対して、これをダウンロードしている人はこれもダウンロードしていますみたいな。

塚本 ● でないと、なかなか見ないですよ。紙媒体からの誘導としてバーコードや QR コードとかはやらないのですか。

乾 ● 論文の一番最後に 1 ページ追加してそういうリンクを入れてしまう方法はどうでしょう。関連する JIP 論文にはこんなのがあります、DP のバックナンバーにはこんなのがありますとか。ちゃんとクリック可能なアイコン付きで、クリックしたら支払が済むようになっていけば。

塚本 ● 今の会誌は記事から関連する過去記事や論文やイベントなんかに飛んでいけません、PDF の中にそのリンクみたいなのが入れられたら、メディアミックスでいろいろな相乗効果が生まれるかも知れません。会誌記事が、情報学広場と Fujisan に加えて、2014 年 10 月からアップルの Newsstand でも売られるようになりまして、今が電子媒体に新たな仕掛けを付け加えていく良い時期です。

平田 ● QR コードは簡単にポンポン生成できます。

塚本 ● ではたとえば DP 論文の QR コードを貼っておけば、会誌の解説記事を読んでいるときにスマホをかざして DP 論文を即座に見られるという風になるのです。ちょっと考えてみます。

乾 ● PDF の解説記事で、参考文献に直接 URL が書いてあるところはクリックブルですか？

事務局 ● Fujisan で販売されているものはクリック



平田圭二
(公立はこだて未来大学)

ブルになっています。

塚本 ● ジャーナル論文とかを参照しているところに QR コードを付けるのは簡単ですが、もっと積極的に何らかのリンクを貼っていきたいですね。

乾 ● すべてデジタル化されているわけですから、各コンテンツをお互いに参照するようなリンクを各段落、各頁ごととかそこらじゅうに埋め込むと、お互いの価値を上げていきますよね。論文だってそうやるとサイテーションが増える可能性があります。

平田 ● 半自動でできそうです。

塚本 ● 広告にも QR コードをつければいいのに、現状はそういうのは少ないのですね

平田 ● もし広告の中に QR コード埋め込むのがデザイン的に問題が多かったら、広告の枠外にあればいいのではないですか。誌面の縁のところに QR コードを置いていけば。

乾 ● でも QR コード、結構大きいです。

塚本 ● 皆さん、だからそういう雑誌の読み方をしていないのでしょうか。スマホを片手に雑誌を読むみたいなのが、もうちょっと一般的になったら効果が出てくるかも。

平田 ● 今はやっぱりコレではないですか (と言って塚本氏の HMD を指差す)。

塚本 ● そうそう、そうですね！

平田 ● ユーザが URL をパッと見たときも画像認識するっていうのもありそう。

塚本 ● 画像処理は重いのでバッテリーがすぐに切れ

そうです。QR コードのサイズの問題もあるかな。でも、将来の形としては十分アリだと思う。会誌でもまた考えてみます。

論文誌編集委員会合宿！

乾 ● 論文誌では、現場でメタ査読や処置判定をやっている編集委員の方たちと年 1 回泊まりの合宿をやっています。今年は 5 月にやりましたが、何年か前から毎年やっているようなことを聞きました。

塚本 ● えっ、泊まって何をやるのですか？ (笑)

乾 ● 去年は編集長が京大の岡部先生だったので京都でやって、今年は仙台で 1 泊しました。そこには主査、副査だけではなくて若い編集委員の方々も集まります。

塚本 ● 我々も合宿してみたいですね、箱根かなんかで (笑)。

乾 ● 何をやるかですが、議題はまず論文誌に関することで、ルーチンワークの振り返り、何かのお題を出してワークショップや自由討論をしたりします。たとえば、査読システムや査読の精度などに関して、問題点、改善点、対応案をそれぞれグループごとに考えてもらって、グループごとに 10 分間発表してもらいます。もう皆さん本気モードなので、2 時間くらい議論するとかなりの確にまとまった結論が出てくるのです。非常に参考になります。

塚本 ● その中から実際に試みたものとか、実現したアイデアというのはあるのですか。

乾 ● さらに査読の短縮化はこの合宿の提案がベースになっていて、ではまず統計データをとってみましょうと。そのほかにもたとえば特急査読コースみたいなものを作れないとか。

平田 ● そのときは投稿料を徴収するのですかね、やはり (笑)。

乾 ● 料金が発生する代わりに 1 週間で必ず終わりますとか。そのときは編集委員も査読者も謝金をもらっても良さそうな気がしますね。査読者を賞賛、感謝するような仕組みです。

塚本● 普段の査読のクオリティをメタが5段階評価することもできますね。

乾● はい、現実にも今そういう議論をしているところですよ。実現はもっと先ですが。

塚本● これは悪い人を排除するためではなく、良い人を褒めるための仕組みです。だから「良い査読をしたで賞」は、割とたくさん的人数に授与するのです。授賞者全員に数千円の副賞を払ってもよさそうですが、もしそれが無理だったら、年間数十人とかでもいいような気がします。

クオリティコントロールと世界標準

乾● PRMS（論文査読管理システム）の辺りもいろいろ問題があります。いよいよ古くなってきて、セキュリティ面でも、保守やアップデートにすごくお金がかかる。そこで自分たちで作るか、それとも商用のシステムを使うかをかなり真面目に考えています。商用システムにはほとんどデファクトのような候補が2つあるのですが、そこで我が論文誌の特殊性が問題になってくるのです。論文誌の処置判定では、皆で論文なり査読結果なりをシェアしてこのコメントでいいかどうかを確認して合議で判定を下しますよね。

塚本● 合議以外のやり方があるのですか？

乾● 私自身経験したことがあります。海外では、たとえば1本の論文に査読者が3人付くとして、それに編集委員長を含めた4人で決めるという形も多いようです。その4人だけで決める。ですから基本的に編集委員長がすごく強い権限を持つ。

塚本● でも、すごい労働量。

乾● すごい労働量とすごい責任のもとでクオリティコントロールする。ところが、候補の2つの商用システムとも合議のためのしっかりした機能を持っているわけでは必ずしもありません。つまり実は世の中の多くのジャーナルは合議制じゃないらしいのです。

平田● 今の話から日本企業のエンタープライズシ



乾健太郎
(東北大学)

ステムを連想してしまいました。日本のソフトウェア産業が弱い理由の1つが、各企業ごとに業務ソフトの細かいところをカスタマイズしてソフトウェア会社がお客さんを囲い込むようなことをやったからであると。ユーザの方もそれがサービスだと勘違いしていたわけです。そして結局日本のソフトウェア産業はガラパゴス化してしまった。それと同じアナロジーが論文誌に適用できるかどうか分からないですけれども、情報処理学会独自の査読方式が、JIPや和文論文誌のクオリティコントロールに本当にプラスに働いているのかどうかは再考してみる価値があると思いました。

乾● はい、確かに。それにも一理ありますが、一方で、1個所に集まって作業することで、作業の引継ぎだけでなく、周囲のいろんな議論を聞く中で査読の感覚を養って、人材の教育や人の交流も生まれる。そのような見識を備えた人々がやがて副査に主査になっていくという構造もあるのだという主張もあります。

塚本● 文化醸成でしょうか。

平田● DPは創刊当初から制度も運用もできるだけ論文誌と同じにしてきました。だから一番最後は合議制で採否を決めています。今の時期は、まだ社会的有用性という概念を皆で形作っている期間なので合議制のほうが合っているような気がします。

乾● そう、査読の基準とかを次の査読者に伝える役目を果たしているのは、結局その編集委員の人た



塚本昌彦
(神戸大学)

ちですから。

塚本 査読結果をサンプリングして皆で分析したりするのもいいんじゃないでしょうか。会誌でも、著者から提出された原稿に関して、編集プロセスでどれくらいどういうコメントを返してどこまで直したかを共有する作業をやった方がいいのかもしれない。

乾 新しく入ってきた人にはすごく参考になるでしょうね。やはり編集委員会によるクオリティコントロールはすごく大切で、人を育てるということも同時に大切なのですね。

塚本 論文誌の編集長って、海外ではボランティアなのですか。

平田 求人というか公募がかかることがありますね、このポジションでこの仕事でこれくらいの給料で。

乾 そういう話もありますね。私がかかわっていた国際ジャーナルではボランティアだったと思います。選ぶ方法も選挙から指名までさまざまですね。

塚本 会誌の編集長は前任の編集長から指名されて、理事会の承認を得ることになっています。これには良いところと悪いところがあると思います。

乾 こうやって話をしていると、論文誌とDPと会誌はだいぶ違うことが分かりました。会誌は柔軟な方たちが頑張っただけ抜けたことをやっていたら。

塚本 だけれども、ちゃんと理事会と連携しながら編集委員会のマネジメントや編集自体もやってますよ。

連携しましょう！

平田 今特集トピックの連携みたいなものは多少あるのですが、もっと積極的なアッと驚くような連携をしませんか(笑)。

塚本 会誌中の掲載論文リストのページはあまり一所懸命見ていないな。

平田 やはりコンテンツと結びついていないので、ただのリストでしかないんでしょうね。

塚本 このページ、なんか面白くしてくださいよ(笑)。たとえば毎号コラムを入れるとか、委員長かワーキンググループの担当の方がコラムを書くというのはどうですか。

乾 それは重たいのですけれども(笑)。

塚本 ちょっと軽いコラムを入れるだけで面白くなるのでは。このページにハイパーリンクを貼るということも検討課題にするのはどうですか。DPも会誌に掲載論文リスト出してますよね。

平田 出してますね。

塚本 このDPのページも、いろいろ発信してハイパーリンクを入れてなんか面白くしてくださいよ(笑)。

乾 コンテンツレベルで相互にリンクが貼れるようになってくるとそれは本当に強力です。たとえば、各論文の一番後ろのページに1枚追加してそこに同じ著者の過去論文へのリンクとかが自動的に貼れるといいですね。論文ごとにいちいち手作業するのは大変ですけど。

平田 論文著者に会誌の解説記事をいくつか選んでもらうのもアリです。

塚本 それは自分の論文を読んでもらうための労力だから、払うに値するわけですね。

平田 論文を読んでもみただけで専門用語が多くてよく理解できなかったとき、解説記事へのリンクが貼ってあるといいです。

乾 それ自動でないと面倒臭いですよね。でも自動はちょっとすぐにはできない(笑)。

塚本 会誌の「会員の広場」に論文誌とDPに対す

る会員やモニタからのフィードバックを載せましょうか。

平田● いいコメントだけお願いします(笑)。

塚本● 会誌のモニタワーキンググループは、DPの中身をちゃんと読んでいるわけではないので、DP編集委員会の方でコメントを選んでもらえると嬉しいです。

乾● 論文誌に関して、もし査読者や著者から何らかのフィードバックをもらうような仕組みを作ったなら、毎回そのフィードバックの一部を「会員の広場」に載せていくというのも面白いかもしれません。

塚本● 誌面を通じてインタラクティブにやっていると、読む方も面白いですよ。

塚本● あと会誌のページ数が増えてくると細かい余白が所々出てきます。今は事務局にイラストみたいなもので埋めてもらっています。論文誌やDPにも、会誌の余白活用に貢献していただくという形で連携を検討してみませんか。

平田● ツイート的な本当にすぐ読めるような短い文章を散りばめるのはどうでしょうか。

塚本● どこにどれだけ余白ができるのかは実際に編集してみないと分からないから、いつの号になってもいいよという短いのをストックしておくというのはあり得ますね。でもタイムリ性が必要なものは難しい。

平田● 実は、DPの論文募集記事を事務局に常に預

けてあって、そんな余白が生じたときには自動的にポイっと入れてもらうという手筈になっています。

塚本● もっといろんな読んで楽しいような内容、コンテンツをダイナミックに用意しておけないでしょうか。

平田● 論文の書き方シリーズみたいな、陥りがちな悪い文例とか。論文誌が年に1回の合宿をやっているという話も、会誌余白に書くといいと思います。

塚本● それは余白にではなく、記事として書いてもらってもいいですよ。

乾● 確かにそうですね。

塚本● 記事を書いたら原稿料を差し上げる代わりに、「書いてくれてありがとう、君、会員にしてあげるよ」と。そうすれば強引に会員が1人増えます。

平田● ここは情報処理学会ですから紺屋の白袴にならないようにIT化していくことを考えつつ、持続的にコンテンツを提供していきたいですね。

乾● そういう風に論文誌でもシステムを考えてみます。

塚本● そうして、この会誌のページをうまく使ってもらって、論文誌とDPを読んでもらうようになって行きたいです。実際にはなかなか難しいかもしれませんが。

平田● そろそろ時間ですね。今日はどうもお疲れさまでした。

塚本、乾● どうもありがとうございました。